

優秀賞（神奈川県教育長賞）

## 言葉の重み

横浜市立大綱中学校 3年 <sup>もりた</sup>森田 <sup>ゆい</sup>結衣



「お母さんの子供に生まれてこなければよかった。」

母と喧嘩をした時、ついそう口にしてしまった。本当は母のことが好きで好きで仕方ないのにもかかわらず、自分がどれだけ傷ついたか気づいてほしくて、咄嗟についた嘘。唇を震わせ、目を伏せている母を見て、私は自分の大きすぎる失言に気づいた。言葉を撤回しなくては、と頭では分かっているのに変な意地が邪魔をして謝罪を言いたせない。結局謝れないまま時間が過ぎていったある日。

私の母は事故で亡くなった。私は母の棺桶の前に大泣きをした。一生分の涙を枯らしてしまうのではと思ってしまうほど、泣いた。鼻声になりながら何度も何度も「ごめんね、ごめんね。」と繰り返した。けれども、目の前にいる母は、蒼白な顔をしたまま微動だにしない。

「どうして生前に言えなかったんだろう。」

私は激しい後悔に苛まれた。もし、生前母に謝っていたのなら、最後まで母との温かい思い出に包まれながら見送ることができていただろう。その時に私は、初めて「言葉の重み」というのを感じた。

言葉というのは不思議なもので人を温めるぬくもりになることも、人の心を鋭くえぐる刃にもなりえる。私は、今回「言葉」という道具の使い方を間違えてしまった。

そして、私と同じように現代の日本も SNS などを通じて、人と気軽に会話できるようになった反面、「言葉の重み」を考えず、軽々と思ったことを伝えて人を傷つけてはいないだろうか。

先日、りゅうちえるさんという芸能人の方が自殺によって亡くなってしまった。彼のブログのコメント欄をさかのぼると、生前には彼のもっている価値観などに対し批判的なコメントが多く見受けられたのに対し、自殺を報道された今では、彼を賞賛するコメントで溢れかえている。本心とは異なることを伝えたり、場面や状況に応じて変えたりすることができてしまう「言葉」は、一度使い方を誤ってしまうと、その人にとって一生消えない傷を作ってしまうこともあるのだ。

そんな「言葉」を上手く使えるようになるために、私は言葉を言うときや書くときには「言葉の重み」を考えながら伝えることが大切だと感じた。例えば、私があの頃「言葉の重み」について考えて発言をしていたら、間

違っても「お母さんの子供に生まれてこなければよかった。」と言い、母を傷つけることは無かっただろう。りゅうちえるさんの件も、直接的な死因はまだ分からないとはいえ、ネットユーザーが「言葉の重み」を考え、誹謗中傷を書き込んでいなければ、彼の精神的苦痛はだいぶ少なくなっていたのではないだろうか。

気軽に言葉を発信することができる今の時代だからこそ、私達は今一度「言葉」という便利な道具を振りかざす前、自分の持っている道具がどれほど重く相手にのしかかるか考える必要があると思う。一度、言葉の使い方を誤って人を傷つけてしまった私だからこそ、これからの人生は、「言葉の重み」を念頭におきながら人に接し、人のぬくもりとなれるよう生きていきたい。そして、人のぬくもりになれるようになった私なら、天国の母に必ず言える。

「お母さんの子供に生まれてきて本当によかった。」